

【ねがいはましては】

令和2年8月25日

KYOWA SCHOOL

第357号

「しんどい君へ」

読売新聞の編集手帳、(1面の左下の部分)に目を奪われました。ジャングルポケット(お笑いトリオ)の斉藤慎二さんの体験が綴られていました。その原文を早速検索し下記に綴ります。教育>STOP自殺 #しんどい君へより

小学3年生から中学生の頃まで、いじめを受けていました。生きていくのがつらくて、絶望しかなくて、首をくくろうとしたこともありました。だから今、苦しくて悩んでいる君に、「この先、楽しいことが待っている。頑張ろう」なんて軽々しくは言えません。

小3の頃、クラスで一番小さくて「チビ」とからかわれるようになりました。上履きがなくなるとか、3階から自分の教科書が落ちてくるとか、そんなことは当たり前。

その夏、虫捕りに誘われました。「これで、いじめは終わったんだ」とうれしくて舞い上がって、待ち合わせ場所に早めに行き待っていると、木の陰から一斉に人が出てきて「お前が虫だ」と袋たたきにあいました。泣くと、「俺らが悪いみたいになるじゃないか。笑えよ」と言われ、無理やり笑いました。相手は11人でした。

クラスで僕1人だけ誕生会に呼ばれなかった時もあります。教室で泣いていたら、担任の先生から事情を聞かれました。先生は「斉藤くんにも原因があるかもしれないね。聞いてみよう」と言いました。僕はクラス全員から順番に、「気持ち悪い」「チビ」などと文句を言われました。

給食をよそってもらえない時期もありました。授業中、「姿勢が悪い」と彫刻刀で背中を刺されることが続いた時には、血が出ても親や周囲に悟られないように、黒い服を着ていきました。

いじめを受けていることは、1歳上の兄に相談していました。優しい兄なのですが、「親には言うな」と口止めされました。両親は共働きで忙しかったので、迷惑をかけてはいけない、心配をかけてはいけないと思い込んでいたのです。恐怖におびえながらも、それを隠し、学校に通いました。

小6になり、卒業アルバムの全体写真を撮る時、「お前を写真に残したくない。来るな」と言われ、登校しませんでした。その頃から、体調不良を理由に休みがちになりました。

長く耐えてきたけれど、やっぱり学校に行くことが怖い。限界だと感じたある日、自殺をしようと思いました。部屋にいと、異変に気づいた兄が駆けつけてきて、「何やってるんだ。死んだら全てが終わる。絶対、時間が解決してくれるから」と叱られました。時間は長くかかったけれど、高校に進学して人間関係が一新されると、いじめは本当に終わりました。

中学の頃から、演劇に興味を持ちました。自分という人間は存在しちゃいけないんじゃないか、でも、役になりきれば自分じゃない誰かになれると思って。短大で演劇を専攻し、そこからお笑いの道に進みました。

いじめられた時のことは鮮明に覚えています。いじめた人を許すことはできません。でも、僕は今も生きていて、好きな仕事ができている。だから、しんどい思いを抱える君には、「君は変われる。誰かを頼ってほしい」ということを、やっぱり伝えたい。

振り返ると、僕も兄も完全に間違っていました。親に早く相談するべきだった。悪いのは、人を平気で傷つけるやつらの方なんだから。

もし、つらいこと、苦しいことがあったら、何かの機会を見つけて僕に直接、相談してほしい。一人ひとり、悩みも状況も違うと思います。僕は、自分を押し殺して耐えてきた時間が長かった分、君の痛みがほかの人よりも分かると思う。この人なら自分のことを話せるという存在になりたい。君の悩みに真摯に向き合い、力になりたいと心の底から思っています。

僕はこれからも芸能界で頑張っていきます。皆さんに笑いを届け、少しでも勇気を与えられる存在になれたらうれしいです。

この文を読み、私の中には悔しさしかありません。担任の先生のことばが突き刺さります。「斉藤くんにも原因があるかもしれないね。聞いてみよう」……。そして「気持ち悪い」「チビ」などと言わせてしまう……。言わせてしまう環境を作っている担任の先生は犯罪者だと思います。

新聞では、「は」と「が」の使い分けについて論じられていました。「お前は虫だ」と「お前が虫だ」のすさまじい悪意のちがいに胸が苦しくなったそうです。

普段、子どもたちは学校で毎日のように他人の「ことば」や「行動」などに傷つきながら生活しています。それを右から左へすーっと通過させながら生活しています。それができなければ生活できない。それは、実社会で大人たちが日々味わっているそれと同様ではないか。すーっとでいいのですか。社会を生き抜いていくためにはそうならなければいけないのですか。大きな疑問を感じます。

私も20代半ばの頃、会社員をしていたことがあります。営業職の方々と賑わうその空間には、毎日のように苦情や問題が発生します。向こうでは部長さんや年上の方々が目を光らせています。その中でも右から左へ上手にストレスをためずに通過させることのできる先輩がいました。片方、真面目一本槍で、きめ細やかに、一つ一つの問題を真正面から処理しようと必死に向かう先輩もいらっしゃいました。その真面目な先輩は、日を迫うごとに痩せていきました。入社当初は90キロ近くあった体重も60キロ近くまで落ち、周りから見てもいたたまれない状態でした。当然、辞めていきました。真面目では生きていけない……。これが私が見た社会の現実でした。とても気の優しい何でも言い値で買ってくれるお得意さんからは、利ざやを高く設定します。なぜなら、高く値をつけても買ってくれるからです。ガミガミと小うるさい、ケチなお得意さんには少しの利ざやしか乗せることができません。なんだこれは……。不可解なことがたくさんありました。これが現実です。これをお読みになっている会社勤めの方々は、なるほどどうなずかれる方は多いのではないのでしょうか。

社会は、現実はそのためのだから、その大波をしっかりと乗り越えられるだけの精神力を社会へ出る迄の間にしっかりと身につけなさい。と、思われる方は多いかもしれません。具体的に言えば、イジメの光景を目の当たりにしても、そのまますーっと何事もなかったかのように受け止めなさい。と、言っているようなものです。

私はどうもその気持ちにはなれないのです。

思い切りのやさしさとおもいやりを育て、あなたの周りに、きみの周りに配っていいようではありませんか。その芽を育て、知らずの内に周りが思いやりとやさしさの花々で一杯になった世界を少しずつですが築いてゆく努力ができる世界……。それが学校ではないのでしょうか。家庭ではないのでしょうか。

基本的には今の日本の教育制度では、評価が存在することでどうしても競争が発生します。その根本的要因が比較を自然発生させ、やがてはイジメへと引火していきます。子どもたちは日々劣等感と戦っています。すべてを比べようとします。その火だねは様々なところから発生します。ひとつには学校、そしてもうひとつが家庭です。家で、兄弟比較が行われると、すでに発生です。親戚のお子さんを例に出されても同様です。

斉藤さんは、お笑いの世界でいきいきとされています。いじめた人を許すことはできません。と、言っています。それが当たり前です。その事実はけっして消えるものではありません。しかしその気持ちを毎日抱えながら卑屈な毎日を送っているのでは、いじめに勝ったことにはなりません。自分自らが生き生きとしてこそ、乗り越えたことになるはずです。

よくここで言う言葉があります。

「何が良くて何が悪いかは、自分が決める」

保育園や幼稚園に通っている子でさえも、かわいそうな子を見れば、「どうしたの」と、そばへ駆け寄りていくはずで。見て見ぬふりはその後徐々に増えていきます。そして大人になったら、信号無視をしてわたっていく人を見ても、声をかけるようなことはしなくなります。それが現実だからです。

でも、学校に通っている間は、せめて……。せめて、良いこと悪いことを自らの判断で堂々と言え環境づくりをしてあげられないのでしょうか。

少なくともここではテストなし、私からの宿題なし、競争なし、時折、わかる子がわからないで悩んでいる子を指導する。(これは私から仕向けます)……。などなど、助け合う学びをフル活用しています。歴史好きな先輩には、「今度後輩たちに定期テストの範囲を聞いて、歴史の準備をしてあげてね。」と頼みます。一番嬉しいのは先輩自身です。ワクワクしています。

子どもたちは助け合うことに飢えています。その反面、競争には疲れ果てています。助け合いながら学びを深めていく……。これが本来の学びの姿だと確信いたします。競うことは、確かにスポーツを見ていると良いことなのかもしれません。しかし、学びは競うことではありません。今日、この社会が忘れてしまった本来の「ひと」の姿を取り戻すことが教育現場では最も必要なことだと思います。

学校からの宿題に追われて元気をなくしている子、定期テストや受験が迫ってきたことで、精神的に逼迫してしまっている子。受験→学びは、どうしても結びつきにくく感じてしまいます。合格するためのハードトレーニングの感覚を覚えます。マイペースで学びを楽しみながら自然と乗り越えていきたいものです。やさしさに囲まれながら……。